

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	松尾 香弥子
最終学歴	学 位	専門分野
お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学 専攻修了	博士（学 術）	認知神経科学、認知心理学、 脳画像計測

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

社会の中で自分も他者も活かせる人材の育成

【目標】

社会に出た時に実際に役立つ知識・技術を伝える

【方針】

双方向的でわかりやすい授業を行う

【計画（方法）】

なるべく毎回、パワーポイント上に QR コードなどで問いへの回答サイトを提示して回答を求め、集計結果を即時に提示するといった、インタラクティブな授業を行う。同様の方法で随時質問を受け付ける。

【担当科目】

（前期）

基礎演習Ⅰ、教育心理学（教育・学校心理学）、心理学概論、人間健康学、専門演習Ⅰ、発達心理学

（後期）

学習・言語心理学、基礎演習Ⅱ、教職実践演習（中・高）、心理学研究法、心理学実験Ⅱ、専門演習Ⅱ、特別支援教育論（中・高）、特別支援教育論（幼・小）

○教育方法の実践

- 上述のように、大教室における授業の双方向性を上げるため、各自の体験に関するアンケートや、教員採用試験・公認心理師試験等の過去問などといった内容について、Google Form によって無記名で回答を求め、結果を即時に提示した。回答サイトへは QR コードを提示して誘導した。
- Teams の Quiz 機能を活用し、授業の最後にその日の講義内容を確認する質問項目への回答を求め、一部は平常点として期末成績評価に反映させた。
- 一部の授業（学習・言語心理学や特別支援教育論など）において、発達障害等の症状の理解を促進することを目的に、「コグトレ」（まちがいさがしなどのような、クイズ形式の認知機能トレーニング）を行った。これは、学生自身の認知機能促進をも考慮している。
- 一部の授業（教育心理学や学習・言語心理学など）において、読書レポート課題の課題図書としてマンガを取り入れた。内容は虐待や発達障害・知的障害などの状況を描いた作品で、学生の取り組みやすさを考慮した。

○作成した教科書・教材

講義に使用したパワーポイントを一部修正（出席調査のキーワードなど授業内容に無関係な部分の削除など）した上で、PDFファイルに変換し、teamsの「クラスの資料」の部分にアップロードした。

○自己評価

おおむね目標を達成できたと考える。初年度であり当初は学生の状況把握に大変戸惑った。1年を経過し、上記の実践戦略をさらに洗練させ、ますます活用していきたいと考えている。

II 研究活動

○研究課題

- （１）言語優位半球形成の仕組みの研究
- （２）発達障害児・者の支援に関する研究

○目標・計画

【目標】

- （１）これまでに得ているデータを用いた論文を公刊する。また次の実験を実施するための環境整備を行う。
- （２）本学で行う発達障害関連の研究の方針を立てる。

【計画】

- （１）２つある大きな仮説のうちの第１番めについて、少なくとも今年中に１本は公刊する。また、近隣の研究施設に連絡を取る。
- （２）授業において発達障害の話題の比重をやや大きく取り、それを通じて今後の方向性を見出す。また知り合いの在籍する発達障害関連の近隣施設を訪問する。

○2016年4月から2024年3月の研究実績（特許等含む）

（著書）なし

（学術論文）

1. Matsuo K, Kono K, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Reproducibility of the lateralization index in functional magnetic resonance imaging across language tasks. *Journal of Neurolinguistics* 57, 100943, 2021.2.
2. Inoue J, Matsuo K, Iwabuchi T, Takehara, Y, Yamasue, H, How memory switches brain responses of patients with posttraumatic stress disorder. *Cerebral Cortex Communications* 2(2), tgab021, 2021.3.20.（松尾は co-first および co-corresponding author）
3. Matsuo K, Kono K, Ysui-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, HomotopicLI: Rationale, characteristics, and implications of a new threshold-free lateralization index of functional magnetic resonance imaging. *Laterality* 27(5), 513-543, 2022.7.
4. Matsuo K, Ysui-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Concordance of lateralization index for brain asymmetry applied to identify a reliable language task. *Symmetry* 15(1), 193, 2023.1.9. <https://doi.org/10.3390/sym15010193>

（学会発表）

1. Matsuo K, Hsu Y-C, Takehara Y, Tseng W-Y I, Mori N, Behavioral response time as explained by a fiber-based analysis of generalized fractional anisotropy measured using diffusion spectrum imaging. Oral presentation #119, 24th Annual Meeting and Exhibition of the International Society for Magnetic Resonance in Medicine, Singapore, 2016.5.
2. Matsuo K, Altered auditory substrates observed in auditory verbal hallucination. Poster presentation #1457. Neuroscience 2017, Washington, D.C., USA, 2017.11.
3. Matsuo K, Auditory system altered in auditory verbal hallucination studied using diffusion spectrum imaging, T1-weighted image and fMRI. Poster presentation #1819. Joint Annual Meeting ISMRM-ESMRMB 2018 (International Society for Magnetic Resonance in Medicine), Paris, France, 2018.6.
4. Matsuo K, Akiyama K, Kaji Y, Which lateralization index and which language task should we use in lateralization test? Digital poster presentation #3918. ISMRM (International Society for Magnetic Resonance in Medicine) 27th Annual Meeting & Exhibition, Montreal, Canada, 2019.5.
5. Matsuo K, Inoue J, Iwabuchi T, Yamasue H, Negative correlations of brain activation between daily recognition and trauma memory remembering in PTSD. Digital poster presentation #3905. ISMRM (International Society for Magnetic Resonance in Medicine) 28th Annual Meeting & Exhibition, virtual meeting, 2020.8.
6. Matsuo K, Yaui-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Neural fiber “conductivity” elucidates a mechanism of language lateralization. Poster presentation (digital) P886.02. Neuroscience 2021, virtual 2021.11.8-11 (in-person Chicago, USA, 2021.11.13-16).
7. Matsuo K, Yaui-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Concordance of lateralization index for hemispheric asymmetry to find a reliable language task. Poster presentation (digital virtual presentation) 241.10. Neuroscience 2022, 2022.11.12-16. (Nov. 13, 2022, 1:00 PM-5:00 PM) (in-person San Diego, California, USA).
8. 松尾香弥子, 竹原康雄, 「拡散スペクトラム画像法の拡散異方性指標と課題反応時間の関係」, 日本磁気共鳴医学会雑誌, 36, S132 (0-1-016, 口頭発表), 第44回日本磁気共鳴医学会大会, 大宮, 2016.9.
9. 松尾香弥子, 「幻聴のある患者の聴覚皮質と聴放線: fMRI、構造画像および拡散スペクトラム画像による灰白質と白質の計測」, 日本磁気共鳴医学会雑誌, 37, S176 (01-16, 口頭発表), 第45回日本磁気共鳴医学会大会, 宇都宮, 2017.9.
10. 松尾香弥子, 「幻聴の神経基盤: MRI 研究」, 第39回日本生物学的精神医学会・第47回日本神経精神薬理学会合同年会 (P-139, ポスター発表), 札幌, 2017.9.
11. 松尾香弥子, 藤井久彌子, 尾関祐二, 下田和孝, 高野賢太, 楫靖, 秋山一文, 「fMRI のラテラルリティ指標が言語課題間でどのくらい一致するか」, 第40回日本生物学的精神医学会・第61回日本神経化学学会合同年会 (P7-2, ポスター発表), 神戸, 2018.9.
12. 松尾香弥子, 秋山一文, 楫靖, 「fMRI の側性化指標の言語課題間における一致度」, 第46回日本磁気共鳴医学会大会 (PDF-002, PDF ポスター発表), 金沢, 2018.9.
13. 松尾香弥子, 楫靖, 秋山一文, 「HomotopicLI: 新しい fMRI ラテラルリティ指標の開発」, 第41回日本生物学的精神医学会 (0-25, 口頭発表), 新潟, 2019.6.
14. 松尾香弥子, 楫靖, 秋山一文, 古郡則雄, 下田和孝, 「新しい側性化指標 HomotopicLI の検証: 右半球優位検出における特異性」, 第42回日本生物学的精神医学会 (01-2, 口頭発表), バーチャ

ルミーティング（仙台），2020.8.

15. 松尾香弥子，古郡則雄，下田和孝，楫靖，秋山一文，「神経線維の「伝達度」により言語側性化の仕組みに迫る」，第43回日本生物学的精神医学会・第51回日本神経精神薬理学会合同年会（P1-26，ポスター発表），京都・オンライン，2021.7.
16. 松尾香弥子，古郡則雄，下田和孝，楫靖，秋山一文，「言語優位半球判定のための信頼できる言語課題を側性化指標の一致度によって評価する」，第44回日本生物学的精神医学会・4学会合同年会，東京・オンライン，2022.11.4-6.

（その他）なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

2020年度 科学研究費助成事業・基盤研究(C) 「言語処理の両側化現象－精神疾患ではなぜ脳の両半球で言語が処理されるのか」(20K07951) (研究代表者・松尾香弥子、令和2-4年度、令和5年度延長、令和6年度再延長申請中、直接経費総額 330 万円)

○所属学会

日本心理学会、日本生物学的精神医学会、日本磁気共鳴医学会、Society for Neuroscience, International Society for Magnetic Resonance in Medicine

○自己評価

あまり達成できなかった。令和5年度は新採用者として授業実施に忙殺され、夏には大病をして入院・手術をし、以後月に2～3度の通院があり、このため研究活動はほとんどまったく行うことができなかった。3月になりようやく研究の作業を再開している。来年度は2年目でありだいたい状況が把握できているため、研究にも時間を割り当てていきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

業務内容を把握する。

【計画】

所属メンバーの先生方に助けていただきながら、活動をまっとうする。

○学内委員等

中高教職課程部会、教職支援センター運営委員会、保健・学生相談センター運営委員会

○自己評価

おおむね目標は達成できた。まだまだわからないことは多いものの、概要を把握することはできたと考ええる。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

名古屋地域について理解を深める。

【計画】

観光地や史跡を訪れて実際を知る。また名古屋に特に関係のある歴史について学ぶ。

○学会活動等

できる限り所属学会等の大会に参加したいと考えていたが、残念ながら一回も参加できなかった。

以下の国際学術誌への投稿論文の査読を依頼され、実施した: Perspectives on Psychological Science、PlosOne、Brain Structure and Function

○地域連携・社会貢献等

該当なし。

○自己評価

あまり達成できなかった。多忙および病気のため、通院以外にはあまり遠出をしなかった。唯一、担当医にラドン温泉を勧められ、愛知県内の猿投温泉に定期的に通うようになった。昨年度はNHK大河ドラマ「どうする家康」で徳川家康について視聴した。もう少し体力に自信がもてるようになったら、県内の徳川氏関連施設を訪れてみたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

該当なし。

以 上